

## 童謡に見る日独の環境意識の違い —ドイツ語の歌が日本語になるまで—

寺 下 太 郎\*

### Difference of environmental conscious between Japan and Germany —An analysis about the translations of songs from German into Japanese

Dr. Taro Terashita\*

**Abstract** : There are many songs for children which came from Germany and were translated into Japanese. This article aims to analyze the process of translation in some of such songs so as to know which words were selected and which were abandoned. In conclusion, the difference of the way of thinking between Japanese people and German people is found out: Japanese will recognize the environment with sympathy, and German will do it as an object.

**Key words** : environmental conscious, German and Japanese songs, translation between different cultures.

**要旨**: ドイツで生まれ、日本語に訳された童謡が多数ある。本稿では、その翻訳過程においてどの言葉が取り上げられ、またどの言葉が訳されなかったか、をみることで、日本人とドイツ人の思考形態の違いを明らかにした。すなわち、日本人は環境を共感とともに認識しようとし、ドイツ人はそれを対象として理解しようとする。

**キーワード**: 環境意識, ドイツと日本の童謡, 異文化間における翻訳

#### 1. はじめに

森林文化の観点から、国際比較を試みた例は今までもいくつかある(たとえば、比屋根ら, 2002)。けれど、そこで分析されているのは、実際の意識の違いにとどまり、その原因や背景に踏み込むものは少ない。言及されるにしても、文化や宗教の違いではないかという推測にとどまる(たとえば、北村, 1981)。本稿は、意識の違いは思考の枠組みとしての言語、文法の違いに起因すると考え、これを、自然と人間とのつながりを歌う童謡の歌詞が翻訳されたとき、どの言葉が残り、どの言葉が消えたかを分析することで検証しようとするものである。

#### 2 「もみの木」

それではまず、歌を歌おう。

もみの木 もみの木 いつも緑よ  
輝く夏の日 雪降る冬の日  
もみの木 もみの木 いつも緑よ

もみの木 もみの木 こずえ静かに  
喜び悲しみ やさしく見守る  
もみの木 もみの木 こずえ静かに

もみの木 もみの木 繁れ豊かに  
雨にもくじけず 風にも折られず

もみの木 もみの木 繁れ豊かに  
(中山知子作詞)

クリスマスの時期によく歌われる「もみの木」である。この歌のものはドイツ語である。それも歌おう。

O Tannenbaum, o Tannenbaum,  
Wie treu sind deine Blätter!  
Du grünst nicht nur zur Sommerzeit,  
Nein, auch im Winter, wenn es schneit.  
O Tannenbaum, o Tannenbaum,  
Wie treu sind deine Blätter!

O Tannenbaum, o Tannenbaum,  
Du kannst mir sehr gefallen!  
Wie oft hat nicht zur Weihnachtszeit  
Ein Baum von dir mich hoch erfreut!  
O Tannenbaum, o Tannenbaum,  
Du kannst mir sehr gefallen!

O Tannenbaum, o Tannenbaum,  
Dein Kleid will mich was lehren:  
Die Hoffnung und Beständigkeit  
Gibt Trost und Kraft zu aller Zeit.  
O Tannenbaum, o Tannenbaum,  
Dein Kleid will mich was lehren.  
(二番と三番 Ernst Anschütz 作詞)

\* 愛媛大学農学部森林資源学コース教育分野森林教育  
Institute of Forest Education, Faculty of Agriculture, Ehime University

さて、これを逐語訳していこう。一番は以下の通り。

おお、もみの木よ、おお、もみの木よ、  
おまえの葉はなんと誠実なことか。  
おまえは夏の間だけ緑なのではない、  
それどころか冬の間も、雪降るときにさえ。  
おお、もみの木よ、おお、もみの木よ、  
おまえの葉はなんと誠実なことか。

常緑樹であることを、いつも態度が変わらず心変わりの  
しない様子にたとえている。二番と三番はこうなる。

おお、もみの木よ、おお、もみの木よ、  
おまえはわたしの大のお気に入りになるだろう。  
クリスマスばかりでなくいつもいつも、  
おまえの幹はわたしをいたく喜ばせる。  
おお、もみの木よ、おお、もみの木よ、  
おまえはわたしの大のお気に入りになるだろう。

おお、もみの木よ、おお、もみの木よ、  
おまえの着てるものは  
わたしに何かを教えてくれる。  
いつの時代にも、希望と耐乏とが  
慰めと力を与えてくれるということ。  
おお、もみの木よ、おお、もみの木よ、  
おまえの着てるものは  
わたしに何かを教えてくれる。

### 3 treu という言葉について

ここで少し脇道に逸れる。すなわち、筆者が上で「treu」を「誠実」と訳したことについてである。それは、この二つの言葉を対比させることでも、やはり関係の結び方におけるドイツと日本の違いが浮かび上がるからである。

たしかに、「treu」は倫理的な価値判断を含む言葉ではある。けれど、これを「誠実」という言葉にしてしまうと、実は少々原語のニュアンスから離れる。

「treu」を独和辞典（国松ら、1998）で見れば、

- 1 心変わりのしない、信義を守る；忠実な、誠実な；忠義な；貞節な
- 2 純真な、偽心（邪心）のない、（相手を）信じ切った；無邪気な
- 3 （事実）に即して）正確な、忠実な

と出ており、treuを誠実と訳す場面があることは否定しない。

しかし、その一方で、「誠実」を国語辞典（金田一ら、1972）で見れば、

言動にうそ・偽りやごまかしが無く、常に自分の良心の命ずるままに行動する様子。

とある。つまり、日本語の誠実とは、自分自身の価値観が

変化しない、ということに力点のある言葉であり、これを逆手に取ったような、「誠心誠意うそをつく」という政治家の言葉さえある。けれど、ドイツ語の treu は、その心がけが揺らがないということではなく、いったんこれと決めた人やものに対する「態度」が変わらない、ということである。

さらに独和辞典（Müllerら、1985）を見れば、

beständig in seiner Gesinnung; fest zu Menschen und Dingen stehend, denen man sich verpflichtet fühlt

とある。いってみれば、「ものの考え方が動じないこと、義務を負っていると感じる人や物事に対してその姿勢を堅持すること」である。この意味では「忠実」という言葉のほうが近いかもしれない。けれど、「忠実」といってしまうと主従関係が前提とされてしまうが、これは原語には無いニュアンスである。

### もみの木の替え歌

ちなみに、この歌には、俗謡がある。

O Mägdelein, O Mägdelein,  
Wie falsch ist dein Gemüte!  
Schwurst mir Treu'in meinem Glück,  
Nun bin ich arm, du gehst zurück.  
O Mägdelein, O Mägdelein,  
Wie falsch ist dein Gemüte!

Der Bach im Tal, der Bach im Tal  
Ist deiner Falschheit Spiegel;  
Er strömt allein, wenn Regen fließt,  
Doch er versiegt, wenn's dürre ist.  
Der Bach im Tal, der Bach im Tal  
Ist deiner Falschheit Spiegel.

おお、おとめよ、おお、おとめよ、  
おまえの心は  
なんと偽りに満ちていることか。  
私が幸運なときには、  
私に信義を誓ったのに、  
いったん貧しくなると  
きびすを返して行ってしまふ。  
おお、おとめよ、おお、おとめよ、  
おまえの心は  
なんと偽りに満ちていることか。

谷の小川よ、谷の小川よ、  
お前の偽りはその水面に現れる。  
雨が降っているときには確かにあふれ出すが、  
乾いているときには涸れ果ててしまふ。  
谷の小川よ、谷の小川よ、  
お前の偽りはその水面に現れる。

もみの木と正反対のものとしてパロディー化されている、このおとめは、たしかに treu ではないかもしれないが、

ある意味、「常に自分の良心の命ずるままに行動」している、つまり誠実であるとはいえないだろうか。

では、この議論は後段で再び取り上げることとして、話を戻す。

#### 4 訳詞と逐語訳

日本語の歌詞とドイツ語の歌詞を比べてみてどう思われたらだろうか。一番の訳詞は、語調を損なうことなく、内容も正しく伝えている。歌を訳したものとしてはこのバランスは驚嘆に値する。また、二番以降の訳詞は、いささか原詩から離れているが、原詩で抽象的に歌われている内容を具体的に説明している、と見ることができよう。

すると、訳詞と原詩の違いは、文法上の構造だけの筈である。この、いわば形式的な違いに、あえて本稿では注目する。

ドイツ語では、もみの木に対して、おまえ、と二人称として呼びかけている。これに対し、日本語は主語を明示せず、結果的に「もみの木」と「歌う人間」とが同一化されている。

訳詞では、いつも緑よ、こずえ静かに、と歌われ、もみの木の描写に終始している。最後の三番になってようやく、繁れ豊かに、と命令文の言葉、つまり歌う人間が主語となり、歌われるもみの木が呼びかけられる対象となる。

これに対し、原詩は、おまえの葉は、おまえは、おまえの姿は、と、たたみかけるように、二人称の呼びかけ (du, dein) を繰り返す、それに対する歌い手自身の立場が、わたし (mir, mich)、として明示されている。

日本語は主語を明示しなくてもいいからこのようになるのであり、また、ドイツ語 (を含めたヨーロッパ言語一般) は主語を明示しなければ文章として成立しないのでこうならざるを得ない、これは、純粋に文法的な違いであって、内容に影響を与えるものではない、と考えることもできよう。けれど、この違いこそが、彼我の意識の違いを、根底で決定してしまっているのではないだろうか。

#### 5 言語の作る世界観

人は、思考するときには必ず言語を用いる。その言語が、人称の決定をいちいち要求する性格であれば、その言語で語るということ、その言語で思考するということが、自動的に世界と自分とを切り離すこととなる。

その結果、ドイツ人 (そして同様の文法を共有するヨーロッパ人) にとって、世界とは自分の外に存在し、自分は世界と対峙する存在となる。従って、彼らの「理解」とは、世界に存在する対象、オブジェクトが自分にとってどのような価値を持つかを「判断」する行為となる。

他方、日本人にとって (文脈に沿って表現するなら日本語にとって)、世界は自分とともにあり、自分は世界の中の事物、オブジェクトと並列される存在である。従って、日本人の「理解」とは、対象がどのようなものであるかを、対象に一番近い視点に立って、つまり相手の気持ちになつて、その対象を「記述」する行為である。

先ほど、訳詞を評して、二番以降の訳詞は、いささか原

詩から離れているが、原詩で抽象的に歌われている内容を具体的に説明している、と述べた。しかしその後の議論から、この対比は、実は、抽象的か具体的かという対比ではないことがわかる。

もみの木という対象を讃えるために、ドイツ語は、そしてドイツ人は、その意味 (より直接的に表現すれば用途) を取り上げた。もみの木は、人間の生活を支える資源であり、そして、人間が善きものとする諸概念の象徴となると。

これをどう訳すかという問題に対し、日本人は、人間の視点を離れようとしている。人を喜ばせる木の状態とは、と考えて、やさしく見守る、という詩につなげ、また、忍耐や力を感じさせる状態とは、どのような姿か、を考えて、雨にもくじけず、風にも折られず、という事実即した描写につなげたのであろう。しかもそこには、木が世界をどう思うかの判断はない。つまり、木を何らかの判断を行えるような主体 (サブジェクト) としてとらえようとはしていない。

以上の観点から、日本に入ってきている童謡を見ると、この考えが適用できる例がかなりある。

さらに三つの例を以下に挙げよう。

#### 6 「こぎつね」

小狐 コンコン 山の中 山の中  
草の実 つぶして お化粧したり  
もみじの かんざし つげのくし

小狐 コンコン 冬の山 冬の山  
枯葉の着物じゃ ぬうにもぬえず  
きれいな もようの 花もなし

小狐 コンコン 穴の中 穴の中  
大きな尻尾は じゃまにはなるし  
小首を かしげて かんがえる  
(勝承夫作詞)

空想の範囲でキツネの生活を叙述している。これを歌いながらのこどもたちのお遊戯は、当然、「こぎつね」になりきっての演技となろう。これに対して、原詩は以下の通り。

Fuchs, du hast die Gans gestohlen,  
Gib sie wieder her!  
Gib sie wieder her!  
Sonst wird dich der Jäger holen  
Mit dem Schießgewehr.  
Sonst wird dich der Jäger holen  
Mit dem Schießgewehr.

Seine große, lange Flinte  
Schieß auf dich dem Schrot,  
Schieß auf dich dem Schrot,  
Daß dich färbt die rote Tinte,  
Und dann bist du tot.

Daß dich färbt die rote Tinte,  
Und dann bist du tot.

Liebes Füchlein, laß dir raten,  
Sei doch nur kein Dieb.  
Sei doch nur kein Dieb.  
Nimm, du brauchst nicht Gänsebraten,  
Mit der Maus vorlieb.  
Nimm, du brauchst nicht Gänsebraten,  
Mit der Maus vorlieb.  
(Ernst Anschütz 作詞)

逐語訳はこうなる。

キツネよ、おまえはガチョウを盗んだな。  
すぐにそいつを返せ。  
すぐにそいつを返せ。  
でなけりゃ鉄砲を持った狩人が  
おまえを捕まえにくるぞ  
でなけりゃ鉄砲を持った狩人が  
おまえを捕まえにくるぞ

彼の大きな長い猟銃が  
おまえに散弾を撃ち込むぞ。  
おまえに散弾を撃ち込むぞ。  
そうなりゃおまえは赤インクに染まって  
そして死んでしまうんだ。  
そうなりゃおまえは赤インクに染まって  
そして死んでしまうんだ。

だからかわいい小ギツネよ、  
言うことをお聞き。  
泥棒にだけはなっちゃいけない。  
泥棒にだけはなっちゃいけない。  
おまえにはガチョウの丸焼きなんかいらぬ。  
ネズミで満足しておきなさい。  
おまえにはガチョウの丸焼きなんかいらぬ。  
ネズミで満足しておきなさい。

大変リアルかつシビアな世界が展開されている。野生動物と人間社会の対立が余すところなく示されている。三番の結論部分もまた徹底している。野生動物を人間社会から遮断するのではなく、害獣であるネズミを捕ればよいんだよ、と、あくまで人間に従わせようとする。

## 7 「ぶんぶんぶん」

ぶんぶんぶん はちが とぶ  
お池の まわりに  
野ばらが さいたよ  
ぶんぶんぶん はちが とぶ

ぶんぶんぶん はちが とぶ  
あさつゆ きらきら

野ばらが ゆれるよ  
ぶんぶんぶん はちが とぶ  
(村野四郎作詞)

原詩は以下の通り。

Summ, summ, summ,  
Bienchen, summ herum !  
Ei, wir tun dir nichts zu Leide,  
Flieg nur aus im Wald und Heide,  
Summ, summ, summ,  
Bienchen, summ herum !

Summ, summ, summ,  
Bienchen, summ herum !  
Such in Blumen, such in Blümchen  
Dir ein Tröpfchen, dir ein Krümchen !

Summ, summ, summ,  
Bienchen, summ herum !

Summ, summ, summ,  
Bienchen, summ herum !  
Kehre heim mit reicher Habe,  
Bau uns manche volle Wabe !  
Summ, summ, summ,  
Bienchen, summ herum !  
(Hoffmann von Fallersleben 作詞)

これを逐語訳するとこうなる。

ぶんぶんぶんと蜂がそのあたりを  
あ痛！わたしたちはおまえに  
何も悪いことをしていないのに  
飛ぶのは森や野原だけにしておくれ  
ぶんぶんぶんと蜂がそのあたりを

ぶんぶんぶんと蜂がそのあたりを  
花の中を探せ、小さい花の中も探せ  
おまえにひとしずくを  
おまえにひとかけらを  
ぶんぶんぶんと蜂がそのあたりを

ぶんぶんぶんと蜂がそのあたりを  
たっぷり持ってうちへお帰り  
わたしたちにたくさんの蜂の巣を作れ  
ぶんぶんぶんと蜂がそのあたりを

違いをはっきりさせるためとはいえ、大変ぎこちない訳となったが、はちがとぶ、という歌詞の部分に当たる原文は、herum という副詞があるだけで、飛ぶという動詞はない。そして、このherumは、そのあたり、と訳したとおり、あるものの周囲を、という意味であり、何の周囲か、は当然の前提とされている。蜂が飛び回るその中心にいるのは、

蜂自身ではなく、ましてや野ばらでもなく、歌い手自身である。

そして、その歌い手とは、一番では蜂に刺され、二番では蜂に蜜や花粉を集めよと命じ、三番では蜂がせせせと作るものを収穫する、「人間」である。

## 8 「野ばら」

童は見たり 野中のばら  
清らに咲ける その色愛でつ  
あかずながむ 紅におう 野中のばら

手折りて行かん 野中のばら  
手折らば手折れ 思い出ぐさに  
君を刺さん 紅におう 野中のばら

童は折りぬ 野中のばら  
手折りてあわれ 清らの色香  
永久にあせぬ 紅におう 野中のばら  
(近藤朔風作詞)

野ばらはドイツを代表する文学者ゲーテの詩である。シューベルトが作曲したものは近藤朔風が、そして、ヴェルナーが作曲したものは勝承夫が、訳詞をしている(志村, 1974)。本稿ではより原詩に近い近藤訳を取り上げた。原詩は以下の通り。

Sah ein Knab' ein Röslein, steh'n,  
Röslein auf der Heiden;  
War so jung und morgenschön,  
Lief er schnell es nah' zu seh'n,  
Sah's mit vielen Freuden.  
Röslein, Röslein, Röslein rot,  
Röslein auf der Heiden.

Knabe sprach: Ich breche dich,  
Röslein auf der Heiden.  
Röslein sprach: Ich steche dich,  
Daß du ewig denkst an mich,  
Und ich will's nicht leiden.  
Röslein, Röslein, Röslein rot,  
Röslein auf der Heiden.

Und der wilde Knabe brach  
's Röslein auf der Heiden.  
Röslein wehrte sich und stach,  
Half ihm doch kein Weh und Ach,  
Mußt es eben leiden.  
Röslein, Röslein, Röslein rot,  
Röslein auf der Heiden.  
(Johann Wolfgang von Goethe 作詞)

逐語訳は以下の通り。

ひとりの少年が、佇んでいる小さなばらを見た、  
荒れ野の中の小さなばら。  
それはとても若々しく、夜明けの光のように美しかった。  
彼はそれを見たさに駆け寄り、  
それを見て喜びに満たされた。  
小さなばらよ、小さなばらよ、紅い小さなばらよ、  
荒れ野の中の小さなばらよ。

少年は言った。「わたしはおまえを折り取ろう、  
荒れ野の中の小さなばらよ。」  
小さなばらは言った。「わたしはあなたを刺そう、  
あなたがわたしをずっと思い出すように。  
そうすればもうわたしは嘆かない。」  
小さなばらよ、小さなばらよ、紅い小さなばらよ、  
荒れ野の中の小さなばらよ。

そして少年は折り取った、  
荒れ野の中の小さなばら。  
小さなばらはわが身を守ろうとして刺したけれど、  
それは彼に何の痛みも与えず、彼は気づきもしなかった。  
だから小さなばらは嘆いているに違いない。  
小さなばらよ、小さなばらよ、紅い小さなばらよ、  
荒れ野の中の小さなばらよ。

これは明らかに男女の仲を暗喩している内容で、グレーチェンを誘惑した挙句に発狂させてしまったファウスト、という関係を髣髴とさせ、いかにもゲーテらしい。けれど本稿では文学批評はせずに、翻訳がどのようになされているかを見よう。

元の詩には、男性的で動物的な人間と、女性的で植物的なばらの「対話」を通じて、非常に緊張感の高いやり取りが窺われる。ばらは痛みとともに相手の記憶に残ることを願うが、人間は刹那の美しさ以外に興味はない。ただ、どちらも自らを ich といい、相手を dich と呼ぶ。性格・性質は正反対であるが、対話の相手として、両者は完全に対等であり、かつ別個の存在なのである。

これに対し、訳詞は、ほんのわずか、二番の一部にのみ、「ばらからみた少年」を表す「君」が垣間見えるだけで、しかも、これだけでは誰が誰を指して「君」と言っているのかわからない。また、「童は」と表現したきり、対話ではなく、情景描写が続くため、主語であったはずの「童」すら、情景の単なる一部分に溶けこんでいく。ここに表現される世界には、わたしとあなた、という対話を交わすための主体は存在せず、なんとなくはかなげなうつくしさ、という叙情だけが残る構造になっている。

## 9 おわりに

従来、ヨーロッパとアジアの自然観の違いは、人間が世界の管理者であるというキリスト教的世界観と、八百万の神あるいは山川草木悉皆成仏という言葉にみられるアミニズム的世界観との対比などで説明されてきた。

これに対し、本稿では、童謡の翻訳過程をもとに、ドイツ人と日本人との自然についての言語表現の違いを見てき

た。ここに明らかになったのは、自然観はもとより、自然への対処の仕方が、習慣や文化といったものだけでなく、思考を規定する枠組みである言語そのものによって変化する、ということである。

現在、わたしたちは、自然環境を考える際、地球規模の視野を必要とする時代に生きている。また、それに対応するかのようには、わたしたちの言葉の中にも、従来の日本語では表現できない内容が、外来語という形で流入してきている。けれど、日本語という文法、言語体系が選択され続ける限り、自然への対処の仕方は、根本的なところでは大きく変化しないだろう。これは、ドイツさらにはヨーロッパ言語文化圏についても同様であり、彼らの、自然を対象物つまりオブジェクトとして捉える思考形態を変えることは困難だろう。

この影響が、たとえば第3節で取り上げた、ふたつの言葉、「*treu*」と「誠実」との概念の微妙な齟齬となって表れる。すなわち、前者は関係性の中で語られる言葉であるため、それは二つの独立した人格を前提としなければ成立しない。これに対し、後者はある性格を形容する言葉であるが、それは、必ずしも複数の独立したものを前提としない。それどころか、双方の同化、相手の存在の自己への取り込みすら否定しない。

この違いはまた、グローバルとローカルとが直結した生

活を送るわたしたちにとって、重要な意味を持つ。たとえば、「自然との共生」という表現は、主体（サブジェクト）による客体（オブジェクト）への共感によって理解しようとする人々（日本語で考える人々）と、主体と客体とに切り分けることで把握しようとする人々（ヨーロッパの言語で考える人々）とでは、実感のされ方が大きく異なり、必然的にその表われとしての行動も異なる。今後わたしたちは、国際的な協力関係の下に環境問題を解決していかねばならないが、諸外国と交流する際、文化や歴史の違いだけでなく、こうした思考法の違いにも留意していく必要があるだろう。

## 引用文献

- Müller, Wolfgang et al 編 (1985) *Das Bedeutungswörterbuch*. Duden Verlag, Mannheim.  
 北村昌美 (1981) 森林と文化. 227 pp, 東洋経済新報社, 東京.  
 金田一京助ら編 (1972) 新明解国語辞典. 第4版, 三省堂, 東京.  
 国松孝二ら編 (1998) 独和大辞典. 第2版, 小学館, 東京.  
 志村建世編 (1974) 世界名歌集. 第2版, 野ばら社, 東京.  
 比屋根哲・池田憲昭 (2002) ドイツと日本における森林利用者の林業観の相違. 日林誌84: 120-124.